10月18日　年間第29主日　マタイ22章15～21節　神に返すものとは

今日の福音も先週に続く箇所ですが、イエスに太刀打ちできなかった長老や祭司長たちはいったん退いて、彼らの弟子たちをヘロデ派の人たちとともにイエスのもとに遣わすことにします。目的はイエスをやり込めることでしたが、果たして彼らのもくろみは成功するのでしょうか。

長老や祭司長はファリサイ派に属していたと考えられます。ファリサイ派は新約聖書では悪役のイメージですが、律法を厳格に守るまじめな人々でした。一方、ヘロデ派は政治的な派閥で、ローマから任命されたヘロデ王を支持する人たちでした。当然ローマにも忠誠を誓っていました。宗教的には相いれない人たちでしたが、イエスを非難するために結託したということです。敵の敵は味方だということですね。

ユダヤ人にとって国の王は、世界の王である神から選ばれる者であり、異教徒のローマ皇帝を王と認めることには抵抗がありました。その皇帝に税金を納めることも、宗教的には許容できないことでした。実際は払わざるを得なかったのですが。それで「皇帝に税金を納めるのは律法にかなうか否か」という質問にたいして「税金を納めてもよい」とイエスが答えたら「あなたは神の教えをないがしろにするのか」と責めることができますし、「納めなくてよい」と答えたらヘロデ派の人たちが「総督に訴えるぞ」と言えるわけです。これはまさに逃げ場のない質問ですね。万事休すといったところです。

当時のイスラエルはローマの属州だったので、ローマの貨幣が使われていました。それでイエスは貨幣に皇帝の肖像と銘があるのを確認させて、「皇帝のものは皇帝に返しなさい」と言われました。皇帝から預かったものならば皇帝に税金で返せばよい、という意味です。みごとな答えですね。まるで「このはしわたるべからず」と立札がある橋の真ん中を歩いて渡ったという一休さんのとんち話のようです。しかし、これはイエスがピンチを切り抜けたという話で終わるのではありません。重要なのはさらに「神のものは神に返しなさい」と言われたということです。ペトロがイエスの受難を否定したときもそうでしたが、ここでは敵対している人々からの悪意ある質問に対しても、そこから大切な教えを伝えられます。彼らや弟子たち、そしてわたしたちに「神から与えられたものは何か、そしてそれを神に返しているか」と問いかけられているのです。

わたしたちが神から与えられているものとは何でしょうか。先々週のぶどう園のたとえ話と合わせて考えると、農夫たちは神から与えられていたものを私物化して、神に返そうとしなかったことになります。わたしたちがこの世で与えられているもの、いのち、財産、能力、家族などいろいろありますが、指導者階級の人々が返さなかったものといえば、やはり神からの選び、恵み、愛というものではなかったでしょうか。ではそれをどのように神に返すことができるのか。その答えは来週の福音にあります。　　（柳本神父）